第 1 回 SPARC Japan セミナー2015

「学術情報のあり方―人社系の研究評価を中心に―」

開会/概要説明

駒井 章治

(奈良先端科学技術大学院大学)



駒井 章治

2008年より奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科准教授。1993年上智大学卒業(心理学)、1997年奈良先端科学技術大学院大学修士課程修了、2000年同バイオサイエンス科博士課程修了。神戸大学医学部、マックスプランク医学研究所にてPDフェロー。2011年より2014年まで日本学術会議若手アカデミー委員会委員長として活動。現在、日本学術会議会長アドバイザー、JSTサイエンスアゴラ推進委員会委員、内閣府・科学技術イノベーションの戦略的国際展開に向けた検討会委員、Science Talks委員。

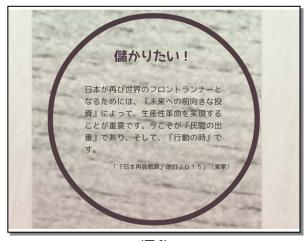
昨今、「文系なんかいらない!」という印象的な記事が世間をにぎわせています。私は企画担当として、これにインスパイアされて今回の企画を考えました。そもそも文系という分け方が正しいのかどうか、文系がいらないのではなく、もう少し違う見方があるのではないかということから議論をしていきたいと考えています(図1)。

文系なんかいらない! 「ミッションの再定義」で明らかにされた各大学の強み・特色・社会的役割を踏まえた速やかな組織改革に努めることとする。 特に教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう努めることとする。 透知「国立大学法人等の組織及び業務全級の見直しについて」

なぜ文系はいらないと言われるようになったか

経済活動が頭打ちになってきて、日本全体のアクティビティーもシビアになっている現状で、どうしたらいいのかということが、そもそもの問題意識だと思っています(図2)。国の儲かりたいという思い、私たち自身の社会生活が豊かになってほしいという思いがモチベーションだと思っています。

そんな中、「ちちんぷいぷい」のキーワードが出て きました(図3)。イノベーションというやつです。



(図1) (図2)

何がしかのすてきなものを生み出してくださいという キーワードが出てきて、それに伴い、出口主義が根付 いてきました(図 4)。出口から見た研究だけではな く、出口を見据えた研究をしっかり考えてやってくだ さいという方向に進んできました。

一方で18歳人口は減少し、社会生活を動かしていく実際の人数は減ってきています(図 5)。この問題をどうしたらいいのかということとともに、大学の評価のあり方が取り沙汰されています。Higher Education Ranking というものが出てきて、これが本当に正しいのかどうかも良く分からない状態で一人歩きした形で、大学ももっと頑張ってもらわないと困るという話になりました(図 6)。

評価の必要性

その中で、文系のあり方というのもしっかり考えな

ちちんぷいぷいい 科学技術イノベーション側出の源泉となる科学技術・学術の進歩に資する基礎研究・学術研究の推進は重要であり、最新の科学技術・学術の知見をもとに既存の学理の再体系化を促すことも意識しながら基礎研究を推進することで、研究成果を効果的に創出していく必要性
「文郎科学者における研究及び開発に関する評価指針」改定

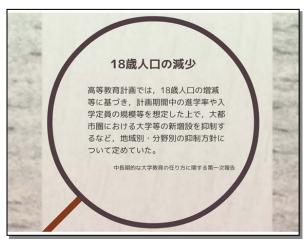
(図3)

学術はいろいろなものがあってしかるべきと考えています。ただ、野放しも問題で、ある程度の評価はやはり必要です。どういう仕事が面白くて、どういう仕事はあまり評価されるべきではないのかはしっかり評価されるべきではないでしょうか。それは人文社会に限らず、理系や工学系においても同じだと思います。それについて、先生方にさまざまな事例をお話しいただき、後にパネルディスカッションで議論したいと考えています。

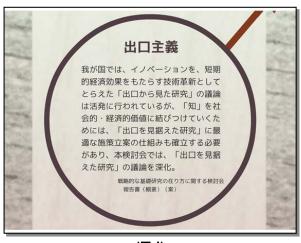
ければいけません。私は学問的な優劣はほとんどなく、

本日の流れ

初めは中尾先生から、科学哲学という視点で、人文 社会にとどまることなく、理系の学問体系としての評 価についてお話しいただきます。野村先生には、社会 科学や政治学、環境学の観点からご議論いただきます。



(図 5)



Higher Education Ranking
学長がリーダーシップを発揮し、各大学の特色を一層伸長するガバナンスを構築、2020年までに、日本人海外留学者数、外国人留学生の受入数を倍増、今後10年間で世界大学ランキングトップ100に我が国の大学10校以上を目指す.

(図 4) (図 6)

永崎先生には、人文系、特に古典をご専門にされている観点からご議論いただきます。中村先生には、研究不正に関してご発言されている立場から評価の多様性についてお話しいただきます。日本の事例はこの4名の先生方にお話しいただき、英国の事例は佐藤先生にご紹介いただくという流れになっています。ぜひ忌憚のないご意見をたくさん頂ければと思います。